特集

立命館大学におけるピア・サポート団体間の連携を促す試み

― 課題と展望 ―

川那部　隆　司

要　旨

本稿では、立命館大学におけるピア・サポートの取り組みの高度化のための、ピア・サポート団体間の連携に向けた取り組みを紹介する。特に、2013 年度および 2014 年度に実施された「Assembly for Peer Supporters」に焦点を当てる。この企画が実施される至った経緯や企画の内容を踏まえ、ピア・サポート団体間の連携の現時点における到達点を整理し、継続的な団体間連携を実現する上での課題を考察する。

キーワード

ピア・サポート、学生支援、学内連携

1　はじめに

ピア・サポートは、「援助のための訓練を受けた同年代の仲間が、問題に直面した仲間を支援する活動」（Cole, 1999: バーンズ亀山・矢部訳、2002）と定義される。大学教育の文脈においては、「学生生活上で支援（援助）を必要としている学生に対し、仲間である学生同士で気軽に相談に応じ、手助けを行う制度」（日本学生支援機構、2009）とされている。また、このピア・サポートを教育実践方法の一つとして捉えた考え方としては、Carr（1981）の定義がある。そこでは、ピア・サポートを、学生・生徒たちに他の人を思いやることを学ばせ、その思い遣りを実践させる方法の一つであり、自らも学生・生徒であるピア・サポーターが、きちんとしたスーパービジョンのもとで仲間の学生・生徒を援助する取り組みだとしている。

ここでは、各定義における用語の違い等については触れないこととするが、要約すると、ピア・サポートの目的として以下の 2 つを見出すことができる。1 つは、ピア・サポート活動に従事する学生を「学生を取り巻く問題を軽減するための労働力」として利用する目的である。これは、杉村・小倉・加藤・松岡・山田（2006）が指摘するように、「学生の心理的問題の多様化に対して、専門家による相談窓口だけではなく、より軽微な問題の段階で気軽に相談できる窓口を開設して、早期に解決する必要が生じた」ことを背景としていると考えられる。実際、ピア・サポート制度を導入している多くの大学では、専門家による学生相談窓口を設けつつ、同時に学生

による相談窓口を設け、日常的な友人や家族への相談から専門家への相談までの中間的な場として機能させている。もう 1 つは、「学生支援の取り組みや正課教育・正課外の諸活動、さらには大学教育の運営に参画させ、彼らのモチベーションや学習に取り組む積極的な態度を、その相互作用の中で高めていこうとする試み」（山田、2010）である。これはまさに、Carr（1981）のピア・サポート・プログラムの考え方であり、ピア・サポートを教育実践の手法の一つと捉えられる。さらに、いずれの目的に対しても、ピア・サポートの効果を示す知見は十分とは言えないものの、特に実践研究事例として蓄積されつつある（たとえば、寺本・伊藤・伊藤・中村、2007：安田・近田、2009、等）。

2　学内のピア・サポートの取り組みを総合的に俯瞰する仕組み

2.1. 学内のピア・サポートを総合的に俯瞰することの利点

日本においては、2000 年に文部省から報告された「廣中レポート」と呼ばれる「大学における学生生活の充実方策について―学生の立場に立った大学作りを目指して―」を契機に、多くの大学でピア・サポートが整理・展開されるようになった。たとえば、愛媛大学には「学習支援、生活支援、障がい学生支援、留学生支援、高校生・新入生支援活動を通して『教え合い、学び合い、助け合う』力を高めることを目的とした制度」として SCV（Student Campus Volunteer）制度がある（泉谷・山田、2013）。SCV 制度が始まった 2003 年時点で、既に 2 団体がピア・サポート活動を行っており、開始に合わせて設立された 4 団体が加わり展開されてきた。その後、活動の範囲や種類の異なる団体がさらに加わり、現在では 9 団体 300 名近くの学生が活動をしている。SCV 全体の運営は教育・学生支援機構教育企画室が担当しており、全体の支援には学生支援センター所属の教員 1 名を含む計 4 名の教員が携わっている。9 団体は各々が独自に活動を行うと同時に、年数回にわたって全体での行事や研修が実施されている。これらの企画は学生が主体となって実施され、担当教員がそれへの助言を行ったり、広報活動の支援やコミュニケーション力、後輩指導、新人獲得方法についてのセミナー等を実施したりしている。

愛媛大学と同様に、総合的なピア・サポート・プログラムを全学的に展開している大学の例としては、法政大学が有名である。法政大学では、2007 年に PSC（Peer Support Community）が設立された。PSC は、全学で 500 名を超える学生スタッフが教職員と協働して活動している。その活動範囲は広く、市ヶ谷、多摩、小金井の 3 キャンパスにわたり、学生センターやキャリアセンター、環境センター、図書館、学務部教育支援か、入学センター等と連携が取られている。

2000 年代以降、愛媛大学や法政大学をはじめ、多くの大学がピア・サポート・プログラムを全学的な総合学生支援制度を整えている。しかしながら、本稿で取り上げる立命館大学には、24 のピア・サポート団体に 3000 名を超える学生が所属しているにもかかわらず、他大学に見られるような全学的な制度やピア・サポート団体を統括する組織が存在していない。この理由の一つとして、立命館大学のピア・サポートの歴史の長さが挙げられる。立命館大学のピア・サポートの端緒となったのは、1960 年代のオリター・エンター活動である。オリター・エンター活動は、新入生の大学生活への適応をサポートすることを目的としており、学生自治会活動の一環として始まった。そして 1991 年度には初年次教育、特に 1 年生の小集団教育を中心に大学側と連携す

ることが決定し、翌年度から活動が始まった。オリター・エンター活動に代表されるように、立命館大学のピア・サポートの取り組みの多くは、学生が大学生活を送る上で直面しうる課題に応じて独自に発展してきたという経緯を持つ。学生自治会あるいは有志の学生が中心になって設立したピア・サポート団体もあれば、大学側が学生の力を活用する目的で設立した団体もある。そのため、学内においてピア・サポートの重要性や意義についての共通理解が容易に得られるという利点がある方で、活動に従事する学生に対する訓練や研修が、担当部局ごとに行われており、その質と量が十分に担保されていないという課題を抱えている。

愛媛大学や法政大学のように、学内のピア・サポートの取り組み全体を俯瞰する総合的な仕組みやセンターを有していることの長所として、沖（2015）は以下の3点を挙げている。1点目は、業務の効率的な分担である。各団体はそれぞれの支援内容に対する専門的な知識や方法を持っている。しかしながら、ピア・サポート団体の支援を利用する学生側が抱える課題は、特定の内容だけにとどまっているとは限らない。たとえば、留学を希望する学生であれば、留学先の選び方や留学先での学びや生活についての情報を得たいと考えているだけでなく、当然ながら帰国後の進路や就職についても不安を抱えていることが予想される。その際、留学に関する支援をする団体と進路・就職に関する支援をする団体とが連携できていれば、情報の交換や他の団体の紹介等が可能になり、より効率的なサポートが実現できる。2点目は、共通の研修である。各団体の支援は領域的に異なるものであっても、たとえば、問題を抱えている学生とのコミュニケーションの取り方、関わり方等は共通して求められるものである。研修を合同で実施することによって、ピア・サポートの取り組みを進める教職員や各団体の中心的な役割を担う学生達の負担を軽減することが可能になる。最後に、3点目として情報の共有が挙げられる。各ピア・サポート団体は、組織内で打ち合わせや会議を繰り返し行い、自らの行動を決定していく。会議がうまく進められなかったり、所属するピア・サポーターの動機付けを高く維持することが難しいといった問題は、たとえ教職員の支援・指導があったとしても、自らの組織の中だけでは解決できないことも多い。また、新人の確保や研修についても同様の問題が生じうる。これらに対して、学内のピア・サポートの取り組み全体を俯瞰する総合的な仕組みやセンターがあれば、互いの優良実践事例を共有することができ、各ピア・サポート団体に携わる教職員はもとより、その運営の中心的役割を担う学生にとっても有益な情報を共有することができる。

3　立命館大学におけるピア・サポート団体間の連携構築の取り組み

3.1　Assembly for Peer Supporters の取り組み

上述の通り、立命館大学ではピア・サポートの取り組みが他大学と比べても非常に活発であり、その歴史も長い。しかしながら、そのことがかえって学内のピア・サポート団体を総合的に把握し支援していく仕組みを作ることの弊害となっている。こうした状況について、学内の教職員だけでなく、ピア・サポートに従事する学生側からも、団体同士が互いに連携できる仕組みを求める声が上がり、「Assembly for Peer Supporters（以下、APS）」という企画が催されるに至った。APS は、教育開発推進機構および教育開発支援課が中心となり、学内のピア・サポート団体とその担当部局に呼びかけ、ピア・サポート団体間の連携を構築することを最終的な目標とした取

り組みであった。

APS の特徴としては、学内のピア・サポート団体を統括する組織の設立やシステムの構築を行い、その中に既存の団体を組み込む方法をとらなかったことが挙げられる。これは既存のピア・サポート団体が数多く存在し、それぞれが独自に活動を展開していたことを考慮してのことである。各団体には独自の組織文化があり、ピア・サポーターとして活躍する学生に強い自負心が育まれていることを踏まえると、新たな仕組みを作りその中に唐突に組み込まれることに対して強い抵抗が生じる可能性があった。そこで、初年度の APS2013 においては、携わる教職員や学生自身に、ピア・サポート団体同士が連携することの必要性や有効性についての気づきを促すことに重点を置くこととした。

APS2013 は、以前より教育開発推進機構および教育開発支援課の主催による教学実践フォーラムの一つとして、2013 年 12 月 12 日に実施された。APS2013 自体は、学内外の学生を含めた関係者に立命館大学のピア・サポートの取り組みについて報告する場であったが、そこでの報告に向けて、複数のピア・サポート団体の代表者[1)]が 3 回のワークショップを通じて、共通の理解を作り上げていった。3 回のワークショップはすべて教育開発推進機構所属の教員が実施した。それぞれの内容を表 1 に示す。まず第 1 回のワークショップでは、参加した各団体の取り組みを可視化し、分類を行っていく作業を通じて、立命館大学におけるピア・サポート活動が学生生活のどのような側面に対して、どのように行われているかを共有することを目的とした。続く第 2 回では、第 1 回で明らかにした多様なピア・サポート活動を効果的に進めていく上で、ピア・サポーターにはどのような力量が求められるかについて、グループで話し合いながらまとめる作業を行った。そして第 3 回では、第 1 回、第 2 回で話し合った内容を踏まえ、立命館大学におけるピア・サポート活動の現状を分析、今後の展開について意見を出し合った。上述のように、APS2013 では、携わる教職員や学生自身に、ピア・サポート団体同士が連携することの必要性や有効性についての気づきを促すことに重点が置かれていた。そのため、3 回のワークショップを通じて、担当教員が団体間の連携が必要であることを強調することはなく、自らの活動を整理する中で、活動内容が違う団体が共通して抱える課題や問題意識を共有するよう働きかけた。

表 1　APS2013 における活動内容

活動	実施日	内容
ワークショップ 1	2013 年 10 月 24 日	ピア・サポート活動の分類および可視化
ワークショップ 2	2013 年 11 月 14 日	ピア・サポーターに共通して求められる知識、技能、態度の発見
ワークショップ 3	2013 年 11 月 26 日	前回までの内容を踏まえた現状分析と今後の展望の検討
教学実践フォーラム	2013 年 12 月 12 日	3 回のワークショップの成果報告

フォーラムの形式で行われた APS2013 では、3 回のワークショップを通じて得られた気づきを踏まえ、立命館大学におけるピア・サポート活動の発展に向けた提言を行った（図 1）。そこでは、ピア・サポーターに求められる資質として、学生のニーズを的確に受け取り、適切な支援ができること、学生同士の学びと成長の輪を広げることの 2 点が挙げられた。さらに、これら 2 点をピア・サポートに従事する各学生が身につけ、学内のピア・サポート活動を質的、量的に向

上させるうえで、4種類の連携が求められることが示唆された。それは、（1）ピア・サポート団体同士の連携、（2）団体の枠を超えたピア・サポーター同士の連携、（3）ピア・サポート団体およびピア・サポーターと担当教職員との連携、そして（4）異なる団体を担当する教職員同士の連携である。（1）から（3）については、APS2013に参加した学生から意見が出され、（4）については、教職員側の気づきとして挙げられた。



図1　APS2013の様子（左・中央：ワークショップの様子、右：教学実践フォーラムの様子）

3.2　APS2013からAPS2014へ

APS2013では、ピア・サポート団体同士の連携の重要性について、ピア・サポート活動に従事する学生自身の気づきが得られた。その一方で、具体的にどのように連携を進めていけば良いかについては議論がなされなかった。そこで、APS2014では、団体間の連携を促進を可能にする方策について検討することを目的とした。教員がワークショップを担当したAPS2013とは異なり、APS2014では学生がワークショップの企画・実施の主体となった。これは、ピア・サポート団体同士の継続的な連携を可能にする上で、実際に活動を行う学生の視点を欠かすことができないと考えたためであった。同時に、APS2013で重視した、大学あるいは他者から強制的に連携を求められたのではないことを、再確認する意味も含まれていた。

APS2014の中心となったのは、学生FDスタッフ2名とAPS2013参加者3名の計5名の学生であった。学生FDスタッフは、教職員と協働して大学教育の質向上のために活動する団体である[2)]。5名の学生が、APS2013を担当した教員1名および職員1名の助言を受けつつ、学内のピア・サポート団体が連携するために何が必要か、またそれを作るためにはどのようにすれば良いか議論を重ねた。そして、立命館大学のピア・サポート団体全体を俯瞰する「ピア・サポート・マップ」と各ピア・サポート団体の活動内容等詳細を示した「ピア・サポート・プロフィール冊子」の2つを作成することが決定した。

表2　APS2014における活動内容

活動	実施日	内容
ワークショップ1	2014年10月28日	ピア・サポート・マップの作成
ワークショップ2	2013年11月14日	ピア・サポート・プロフィールの作成
ワークショップ3	2013年11月26日	団体間の連携のイメージを得るための合同企画案の策定
教学実践フォーラム	2014年12月18日	3回のワークショップの成果報告

APS2014 は、ピア・サポート・マップとプロフィール冊子の作成を目標として、前年度と同様 3 回のワークショップを行い、教学実践フォーラム（2014 年 12 月 18 日）においてその成果を発信する形式をとった（表 2、図 2）。APS2014 には、13 団体 19 名の参加があった[3)]。第 1 回のワークショップでは、ピア・サポート・マップの作成を行った。マップ作成において、まず、既存の広報冊子に紹介されていたピア・サポーターの活動の 5 領域（「生活」、「学習」、「国際」、「進路」、「広報」）に、各団体の活動内容が分類された。しかしながら、これら 5 領域は学年進行等の継時的変化の観点が欠けており、支援を受ける学生の姿や支援を行うピア・サポーターの姿が十分に反映できなかった。そこで、5 領域を参考にしながら、学生の入学から卒業までの時間の流れを考慮に入れ、再度分類を行った。



図 2　APS2014 の様子（左：ワークショップの様子、中央：教学実践フォーラムの様子、右：教学実践フォーラム後の自主勉強会の様子）

ピア・サポート・マップは、各ピア・サポート団体が、学生生活のどの時期に、どのような側面の支援を行っているかを示したものである。立命館大学におけるピア・サポートの取り組みの全体像を俯瞰する上で有用ではあるものの、各団体が具体的にどのような活動を行っているかについて示したものではない。したがって、マップだけでは、実際にピア・サポート団体同士が連携を進めることは難しい。そこで、作成されたのがプロフィール冊子であった。団体名称や担当部局、サポート対象、活動理念といった基本的な情報に加え、団体間の連携を促すために、「GIVE」と「TAKE」という欄が設けられている。「GIVE」は他団体に向けたアピール・ポイントであり、その団体が得意とする活動内容や他団体には見られない特徴、連携する際の強みとなる点が書かれている。たとえば、正課の初年次教育に組み込まれているオリター・エンター団であれば、各学部新入生全員と連絡を取ることができるため、他団体と比べ、何らかの企画を行う際の広報活動等を効果的に行うことができる。一方、「TAKE」は自団体に不足している点や他団体に協力を求めたいと考えている点が記載されている。再びオリター・エンター団を例に挙げると、留学やインターンシップを希望する学生に対して提供する情報が、個々のオリター・エンターの知識や経験に左右されてしまうことがある。こうした場合、オリター・エンターである学生が留学やインターンシップに関する情報を入手する方法が提供されたり、相談に来た学生に対して、留学やインターンシップに関する支援を行っている団体を紹介できるようにすることが望ましい。

APS2014 における第 1 回、第 2 回のワークショップでは、ピア・サポート団体同士の連携を促進するためのツールとして、マップや紹介冊子の作成が行われた。第 3 回のワークショップでは、APS2014 に参加していない団体が、マップや冊子の活用方法および実際の連携のイメージ

を得やすくするために、連携の具体例を検討した（表3）。

表3　APS2014、第3回ワークショップで提案された連携案

企画タイトル	内容	提案メンバー
新入生、壁を越えて仲良くなろうぜ！（Beyond Borders）	新入生と留学生を対象とした、国際交流イベントを実施する	文学部オリター、留学生チューター TISA、GGP 学生支援団体まいる、JA
ピアサポ1日体験ツアー	新入生を対象とした、キャンパス内でピア・サポートの模擬体験ツアーを実施する	学生広報スタッフ、留学アドバイザー、RAINBOW STAFF
Insightful Open Campus（より充実したオープンキャンパスを作ろう）	入学希望者を対象としたオープンキャンパスツアーへのピア・サポート団体の協力・連携企画を実施する	入試広報学生スタッフ、障害学生支援室サポートスタッフ、ライブラリースタッフ
ボランティアでやりたいことみつけよう！	学部新入生を対象とした、ボランティア体験企画の実施	経営学部オリター、学生コーディネーター、D-Plus

4　課題と展望

ここまで、APS2013 および 2014 の開催経緯とそれぞれの内容について概観してきた。以下では、これらの取り組みを通じて、今後、立命館大学におけるピア・サポートの取り組みの高度化に向けた課題を整理し、展望を述べる。

APS2013 では、3 回のワークショップと最終報告会であるフォーラムを通じて、ピア・サポート団体同士が連携することの必要性と重要性が、多くの学生と教職員の間で共有された。また、APS2014 においては、ピア・サポート団体間の連携を促すためのツールとして、「ピア・サポート・マップ」と「ピア・サポート・プロフィール冊子」が作成され、具体的な連携のアイデアも提案された。2 年にわたる APS の取り組みによって、立命館大学においてピア・サポートに携わる教職員とピア・サポート活動に従事する学生とが、互いに連携していく基盤が整ったと言える。一方で、以下 3 点の課題が残されている。1 点目は、ピア・サポートの充実に向けた相互連携の重要性の認識をさらに広める必要があることである。立命館大学には 24 のピア・サポート団体が存在しているが、全ての団体が APS に参加していたわけではない。APS に直接的に関わった特定の団体間だけで連携が行われるのではなく、立命館大学におけるピア・サポートの取り組み全体が有機的につながりを持つようにするためにも、今後一層の周知を行っていく必要があろう。

ピア・サポート団体間の連携における課題の 2 点目は、実践事例の蓄積である。APS2014 では、具体的な企画が提案されたが、現時点ではアイデア段階で止まっており、実施には至っていない。原因としては、各団体の役割や協力を得るべき部局の明確化、各団体に所属する代表者以外のピア・サポート学生への周知の方法といった企画の詳細が決定していなかった点で挙げられる。もちろん APS2014 自体は、複数のピア・サポート団体が合同で企画をするイメージを伝えることを目的としていたため、概要を決定するだけでも十分であったが、関係者が通常よりも多くなることを考えると、実際に何らかの企画を進める際には、徹底した計画立案が求められる。

残されている課題の 3 点目としては、APS のような複数の団体が連携するきっかけを生む機会を、どのように継続的に提供していくかを検討する必要があることである。今後、ピア・サポート・マップやピア・サポート・プロフィール冊子を各団体や担当教職員に配布したり、Web 上で公開したとしても、課題の 2 点目としても挙げた実践事例の蓄積が進み、ピア・サポート団体同士が連携することが学内に定着するまでには時間を要することが予想される。それまでの間、APS のような取り組みを実施していくことが必要であろう。

立命館大学においては、2015 年度から新たなピア・サポート団体が設立され、既に取り組みを始めている。この団体は、ピア・サポート団体同士の連携を促し、立命館大学におけるピア・サポートの高度化を目的とする団体であり、「ピア・サポーターのためのピア・サポート」を行うという意味で「P4P（Peer Support for Peer Supporter）」という名称がつけられている。今後は上記の課題を解決しつつ、合同での研修や実習の開発・実施、さらには立命館大学におけるピア・サポートの取り組みの効果検証等での活躍が期待される。

注

1）APS2013 には 13 団体から計 19 名が参加した。参加団体は、オリター・エンター、ES（教育サポーター）、ライブラリースタッフ、JA（Junior Advisor）、留学生チューター TISA、D-Plus、学生 FD スタッフ、GGP 学生支援団体まいる、学生広報スタッフ、入試広報学生スタッフ、学生コーディネーター、障害学生支援室サポートスタッフ、であった。

2）学生 FD あるいは学生 FD スタッフの定義については、特にピア・サポートの取り組みとの区別について、明確になされていないが、沖（2013）では「学生 FD スタッフとは、その分野における専門性を持ち、教職員と協働して大学運営や FD 活動そのものへの参画や意見の表明等を行う学生、あるいはそれに伴う学生主体の企画、事業の実施などに従事する学生。学生自治会に所属する場合もあればボランティアや大学の正式な委員会に所属する場合もある」とされている。

3）APS2014 には 13 団体から計 19 名が参加した。参加団体は、オリター・エンター、ライブラリースタッフ、RAINBOW STAFF、JA（Junior Advisor）、留学アドバイザー、留学生チューター TISA、D-Plus、学生 FD スタッフ、GGP 学生支援団体まいる、学生広報スタッフ、入試広報学生スタッフ、学生コーディネーター、障害学生支援室サポートスタッフ、であった。

参考文献

Carr, R. A. “The Theory and Practice of Peer Counselling”, Canada; Peer Resources, 1981.

Cole, T. “Kids Helping Kids”, Canada; Peer Resources, 1999.

（バーンズ亀山静子・矢部　文（訳）『ピア・サポート実践マニュアル』川島書店、2002 年）

泉谷道子・山田剛史「体系的なピア・サポート活動による学生の学びと成長」『大学教育実践ジャーナル』第 11 号、2013 年、61-67 頁。

日本学生支援機構『「大学、短期大学、高等専門学校における学生支援の取組状況に関する調査について」調査報告』、2009 年。

沖裕貴「学生参画型 FD（学生 FD 活動）の概念整理について―『学生 FD スタッフ』を正しく理解するために」『中部大学教育研究』第 13 号、2013 年、9-19 頁。

沖裕貴「「学生スタッフ」の育成の課題―新たな学生参画のカテゴリーを目指して―」『名古屋大学高等教育研究』第 15 号、2015 年、5-22 頁。

杉村和美・小倉正義・加藤大樹・松岡弥玲・山田奈保子「ペア相談と学生の主体性を取り入れた大学での

ピア・サポート活動」『青年心理学研究』第 18 巻、2006 年、51-62 頁。
寺本憲昭・伊藤昭・伊藤則男・中村成夫「学生活動の効果検証―オリター活動（上級生による新入生支援組織）をケースに―」『大学行政研究』第 2 号、2007 年、133-146 頁。
山田剛史「ピア・サポートによって拓かれる大学教育の新たな可能性」『大学と学生』第 87 号（通巻 561 号）、2010 年、6-15 頁。
安田淳一郎・近田政博「教育改善活動に参加する学生の意識変化―名大物理学教室における学生教育委員会の事例―」『名古屋大学高等教育研究』第 9 号、2009 年、113-132 頁。

Promoting the Cooperation of Peer Support Groups in Ritsumeikan University: Issues and Perspectives

KAWANABE Takashi（Associate Professor, Institute for Teaching and Learning, Ritsumeikan University）

Abstract

This paper introduces a series of approaches for the cooperation of peer support groups which aims to improve the peer support activities in Ritsumeikan Univeristy. Especially, the event “Assembly for Peer Supporters” held at 2013 and 2014 is focused on. Based on the background and contents of this event, the current situation of the peer support activities in Ritsumeikan University is described. And the issues and perspectives of sustainable cooperation of peer support groups are discussed.

Keywords

Peer Support, Student Services, Internal Network